京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成26年9月23日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　辻　井　昭　雄　様

所属部局・研究科　医学研究科人間健康科学系専攻

職 名・学 年　修士課程2年

氏　　名　足 達 大 樹

助成の種類	**平成26年度・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成**	
研究集会名	第10回ヨーロッパ老年医学会国際集会	
発表題目	年代層別における胸郭拡張差および呼吸機能の違い −地域在住高齢者における横断的研究−	
開催場所	オランダ・南ホラント州・ロッテルダム	
渡航期間	平成26年 9月14日　～　平成26年 9月21日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　☐ 無　☐ 有(　　)	
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円
	使用した助成金額	250,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	学会参加費 28,860円
		往復航空券 105,750円
		宿泊費 27,950円
		滞在中の諸経費 87,740円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)	

＜成果の概要／足達大樹＞

この度、京都大学教育研究振興財団の助成を受けて、2014 年 9 月 17 日から 19 日にかけて、オランダ・ロッテルダムで開催された第 10 回ヨーロッパ老年医学会学術集会に参加したため、その成果をここに報告する。

＜研究集会の概要＞

研究集会名：第 10 回　ヨーロッパ老年医学会学術集会
(10th International Congress of the European Union Geriatric Medicine Society.)
主催者：ヨーロッパ老年医学会
(European Union Geriatric Medicine Society)
開催場所：オランダ・ロッテルダム　デドーレンコンベンションセンター

ヨーロッパ老年医学会議は、病理学・臨床医学・リハビリテーション学・社会科学など、様々な観点から、加齢に伴う多くの病態解明や治療発展などを目指し、最新の知見を相互に提供し合う場として、毎年開催されている学際的な集会である。本年度の会議は 3 日間にわたって行われ、欧州を中心とする世界 50 ヶ国の約 2500 名が出席し、上述した分野に関するシンポジウムや口述発表、ポスター発表が行われた。会議における中心的トピックは高齢者における筋量減少症（サルコペニア）や、虚弱（フレイリティ）など近年に本邦においても着目されている項目であり、それらに対する各国の運動介入や栄養指導の実際が数多く報告されていた。

報告者にとって今回が初めての国際会議の参加であったが、様々なセッションの発表を聴き、世界各国で行われている最先端の研究内容に触れ、今後の研究において大きな刺激となり、大変有意義なものであった。

次回大会は 2016 年 9 月 17 日～19 日に、ノルウェーのオスロにて開催されることが決定している。

＜発表内容の概要＞

報告者は、学会 2 日目のセッションにおいて、「The differences of chest wall mobility and respiratory function among age groups. -A cross sectional study for healthy elderly-年代層別における胸郭拡張差および呼吸機能の違い-地域在住高齢者における横断的研究-）」という題目でポスター発表を行なった。

発表内容は、健常高齢者における胸郭拡張差の加齢変化を検討するというものである。

肺を囲む胸郭の拡張性を、メジャーを用いて測定する胸郭拡張差は呼吸リハビリテーションなどの効果を簡便に評価する指標として、臨床上頻繁に用いられる評価のひとつである。近年は地域に暮らす潜在的呼吸器疾患患者の増加に伴い、評価の簡便性から臨床場面だけでなくフィールドにおいてもその有用性が期待されている。しかし、呼吸機能は健常者において加齢の影響を強く受けることが報告されているにも関わらず、胸郭拡張差が加齢による影響をどれほど受けるのか、また胸郭の中でもどの部位が加齢の影響を受けるのかを検討した研究はみられ

ない。そこで本研究では、高齢者 132 名を対象とし、横断的研究として地域在住高齢者を年齢別に層分けすることで胸郭拡張差および呼吸機能の差異を検討した。調査項目はスパイロメーターによって測定した努力性肺活量と一秒量、メジャーを用いて腋窩高、剣状突起高、第 10 肋骨高における最大呼気位と最大吸気位との胸郭拡張差を測定した。また年齢から対象者を 4 群（group 1, 65–69 歳; group 2, 70–74 歳; group 3, 75–79 歳; group 4, 80 歳以上）に分類した。統計解析は、4 群の呼吸機能および 3 カ所における胸郭拡張差の差異を一元配置分散分析によって検討した。有意水準は 5%未満とした。

この結果その結果、地域在住高齢者において呼吸機能だけでなく、腋窩高の高さで高年齢層は低年齢層と比べ有意に胸郭拡張差が低下していることが明らかとなった。また呼吸機能の低下と比較すると、呼吸機能低下に先行して胸郭拡張差が低下する傾向が明らかとなった。そのため、今後は健常高齢者に対しても呼吸リハビリテーション等で用いられる運動によって胸郭の拡張性を維持する必要があると同時に、呼吸機能低下に先行して起きる胸郭拡張差低下の原因を明らかにする必要があると考えられる。

2 日間にわたるポスター発表を通して、同分野の先行研究者や他の研究者との情報交換を行なうことができ、今後の研究デザインについて再考することができ、非常に有意義な発表であった。

＜謝辞＞

最後になりましたが、今回の国際研究集会の参加を助成して頂き、発表の機会を与えて下さった京都大学教育研究振興財団に心より厚く御礼申し上げます。京都大学教育研究振興財団の益々の御繁栄を心より御祈り申し上げます。